

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 69 回 今再び、人の 3 倍、働いていますか？ ～ 生き残りのために

大都会に乱立する巨大「都市ホテル」。外から見ると派手で、豪華で、いかにも儲かっているかのように見えるが、いや、内情はそうともいえない。激烈な競合合戦を展開し、日々猛烈な営業努力を繰り返し、その、凄まじさは、筆舌に耐え難い思いがある。

以前このコラムにも書いた（第 47 回）が、彼らは「三職主義」といって、一人の人が 3 つのユニホームを持っている。と言えば聞こえはいいが、言い換えれば、一人 3 つの職場を担当させられているということになる。時（T）と場所（P）、状況（O）に応じ、3 つのユニホームを着替え、何時でも臨機応変に動ける体制を準備し、即座に対応していく労務態勢の実践をしている。

「私はフロントだから...」「オレは経理の採用だから...」、こんな発想でしか動かない人は、人材として認めない。貴重な人件費を無駄にする、スタッフ全員の共通の「敵」と見なす！...そんな厳しい雰囲気当たり前の環境の中で、必死の営業を繰り返している。

某、自動車メーカーの人と話す機会があった。あえて明記しないが、日本で一番の収益を誇る自動車メーカーである。年の頃は 30 歳そこそこ、まだ偉そうな肩書きもない、でも、やたら声が大きくて、精悍な顔立ちをした好青年である。

色々な話をした中で、最後に彼は平然と言い切った。「先生、我々の会社の人間は、1 日、16 時間働きます。それだけ働かせて頂ける事を、みんな誇りに思っています。」

講演や、あまりありがたくない実務書の事例としては、こんな話を聞いたことはあったが、目の前で実際に聞いたのは、初めてであった。「この会社には、とても適わない...」、啞然として、そんな感想しかもてなかった。

労働基準監督署、石より硬い社会保険労務士、世の中斜めに見がちな労働組合関係者、脱法行為を告発するつもりも他意もない。もちろんお咎めの事実も存在するはずがない。

今、大・小の区別なく、がんばっている企業しか生き残れない。がんばっている企業は、そうでない会社より 3 倍以上働いている。代表者を筆頭に全スタッフが意識を高め、毎日が真剣勝負の覚悟を持って動いている。適当に、与えられた任務だけを時間内にこなしていく、そんな社員の居場所はない。実績を挙げられない理由を如何に転嫁するか、そんなことに時間を費やす無責任社員、向かっていくどころか、敵前逃亡を企て逃げまわる、人はいいがファイトもチャレンジ精神もない従業員、君たちの働く場所は、今の日本には、何処にもない。代表者だけでもだめ。従業員だけががんばってもうまくいかない。両者共に必死の働きがあって初めて、生き残りの戦略が成り立っていく。

代表者自らが不正な株操作をする鉄道屋や新聞屋、誤魔化して隠そうとする銀行屋、ラッパ吹くだけの成金スーパー屋、自分だけはいかにも偉そうな厚顔さは共通しているが、

従業員は不幸であり、居た^{たま}堪れない。何としても、がんばるしか、ない！！と思っている。